

# 福井市の戦災・震災復興計画と熊谷太三郎

高橋 利之<sup>1</sup>・山口 敬太<sup>2</sup>・川崎 雅史<sup>3</sup>

<sup>1</sup>正会員 (株)オリエンタルコンサルタンツ 都市デザイン部  
(〒151-0071 東京都渋谷区本町3-12-1, E-mail:takahashi-ty@oriconsul.com)

<sup>2</sup>正会員 京都大学大学院助教 工学研究科  
(〒615-8540 京都府京都市西京区京都大学桂C1-1, E-mail:yamaguchi.keita.8m@kyoto-u.ac.jp)

<sup>3</sup>正会員 京都大学大学院教授 工学研究科  
(〒615-8540 京都府京都市西京区京都大学桂C1-1, E-mail:kawasaki.masashi.7s@kyoto-u.ac.jp)

本研究では1945年7月の福井空襲及び1948年6月の福井地震により被災した福井市を対象に、復興都市計画におけるヴィジョンと思想を明らかにした。また、復興を機に整備された地域のシンボル空間がどのような思想や活動のもと、保全、創出されたのかを明らかにした。

**keywords** : 復興都市計画, 都市計画思想, 公園緑地, 景観整備, 河岸緑地

## 1. はじめに

2011年3月に発生した東日本大震災の復興が進められている現在において、また、首都直下、東海・東南海・南海の大規模地震の発生が予測されている現在において過去の大災害における復興の在り方や復興に大きく寄与する復興思想を明らかにすることは大きな意義があると考えられる。また、大都市の復興の重要度も然る事ながら、少子高齢化が進む現代社会に於いて地方中小都市の復興が今後の災害復興においてより大きな課題となると考えられる。

そこで本研究では、震度7を新たに設定する契機となるなど、当時は関東大震災に次ぐ大規模な地震であった福井地震において、被害が甚大であり復興都市計画を実施した地方中小都市の福井市を対象地とした。福井市は福井地震発生の僅か3年前にも戦災によって壊滅的な被害を被った都市であり、機業を主産業とする小都市であった。「福転じて福と為す」を合言葉に復興を目指した福井市の復興ヴィジョンや思想にどのような特徴が存在していたのかを論述する。

本研究では具体的に、1) 福井市の復興都市計画における復興ヴィジョンとその根底に存在する思想を明らかにすること、2) シンボル空間の保全、創出を巡る思想や活動を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究の位置づけ

### (1) 既往研究

本研究に関連する既往研究としては下記が挙げられる。福井市編集の『新修福井市史 I・II』(a)では公文書や福井新聞を基に戦災及び震災復興都市計画の目標、各委員会の活動、各種事業、事業実施機構等について論述されており、復興の全体像を明らかにしている。また、一部熊谷太三郎市長の言葉を引用しているものの、思想の分析までには至っていない。

福井県編集の『福井震災誌』(b)では公文書を基に都市計画街路・上水道・河川水路・瓦斯・公園緑地・土地区画整理の考え方や事業費を明らかにしている。

建設省編集の『戦災復興誌 第7巻 都市編IV』(c)では公文書を基に福井市の戦災復興計画及び各種事業の概要、各種計画変更の変遷、事業費等を整理している。

内閣府編集の『1948 福井地震報告書』(d)では、新修福井市史等の既往文献、GHQの報告書、復興事業関係者へのヒアリングを基に戦災復興事業が震災復興事業として引き継がれ、『事前復興』として迅速な都市づくりを可能とした復興の特徴を明らかにしている。

### (2) 本研究の位置づけ

上記の既往研究(a)~(c)は戦災及び震災復興都市計画や各種事業の内容・事業費等を、(d)は戦災復興事業が震災復興事業として継続されたため迅速な復興が行われた福井市の復興の特徴や『事前復興』の重要性を明らかにしている。また、(a)、(d)では熊谷太三郎市長の言葉を一部

引用しているものの、思想と復興都市計画の関係性については明らかにされていない。

既往研究では何れも復興都市計画や事業の内容等を整理しているのに対し、本研究では福井市の復興都市計画を先導した熊谷太三郎市長の思想に着目し、どのような考えの基に復興都市計画が行われたかを明らかにする。また、復興事業を契機に整備されたシンボル空間がどのような計画思想に基いていたかを明らかにする。

### 3. 福井市の戦災・震災復興都市計画

#### (1) 戦災・震災の被害状況

##### a) 福井空襲による被害（昭和20年7月19日）

『新修福井市史Ⅰ』、『戦災復興誌第7巻都市編Ⅳ』によると福井空襲による被害は下記の通りである。<sup>1)2)</sup>

福井市は昭和20年7月19日午後8時半頃米軍B29約120機によって約2時間に亘る空襲を受け、罹災面積約5.94km<sup>2</sup>と市街地の約9割5分を焦土と化した（**図1**）。罹災世帯数は21,992（罹災前は25,691）、罹災人口は85,603人（罹災前は103,049人）であり、死者1,576人、重傷者481人、軽傷者1,086人となっている。被災区域内は、一部の鉄筋コンクリートの建築物を残した以外はほとんどの建築物や施設は焼失した。

##### b) 福井地震による被害（昭和23年6月28日）

福井市は昭和20年の福井空襲の僅か3年後の昭和23年6月28日に丸岡町を震源として発生した福井地震により、またしても甚大な被害を受けることとなる。その被害状況は震災前家屋数17,805戸に対し倒壊家屋が11,404戸、半壊家屋が1,616戸、焼失家屋が2,407戸であり、死者937人、負傷者10,000人となっており<sup>3)</sup>、震災前の家屋の約9割が再び罹災したことになる。

なお高柳によると戦災復興として行われた都市計画の進捗状況は震災直前までに、土地区画整理事業の換地指定が約90%、街路工事が約20%、水路工事が約10%完了していたことが明らかにされている<sup>4)</sup>。

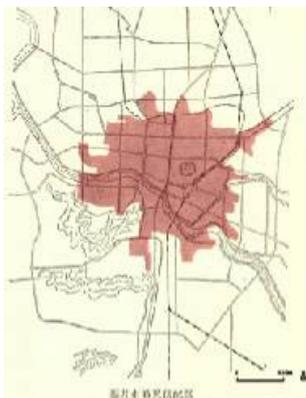


図-1 福井市戦災状況図

#### (2) 戦災・震災復興都市計画の概要

##### a) 道路委員会の活動

福井市は終戦後の昭和20年10月2日に市長に就任した熊谷太三郎のもと復興計画を推進することとなるが、熊谷市長は政府が戦災都市に都市計画を実施することを昭和20年の9月に知ると、昭和20年12月30日に「戦災地復興計画基本方針」が閣議決定される一ヵ月前の11月には都市計画に基く道路計画の計画案を策定した<sup>5)</sup>。

終戦から三ヵ月程という短期間で道路網の決定が行われた裏には市長の諮問機関である道路委員会という組織が存在した<sup>6)</sup>。この道路委員会は熊谷が市長に正式に就任する前の昭和20年9月12日に開会式を兼ねて初の委員会を開いている。組織の構成は委員長に熊谷市長、副委員長に水間助役、委員に市議会、町内連合会会長、その他有力者若干名であった。

道路委員の役割は戦災地を5区域に分類し、その区域毎に小委員会を設け、区域内の幹線道路以外の補助幹線以下の道路の復旧、改修、整備に関する調査計画を行い、更に互選した主査が調査計画を取りまとめて委員長である熊谷市長に報告して最後の決定を行うというものであった。

この早期の道路計画の決定を急いだ理由として熊谷は「私がかくの如く道路計画の決定を急いだのは、各戸の復旧を急ぐ一般市民に少しでも早く之を予知せしめ、計画の遂行に際して少しでも支障を少なからしめたいと考えたが故に他ならない」と記しており、都市計画の実施に関する市民の注意を喚起する上に於いて相当の効果があり、その後の事業遂行に多大の便益をもたらすこととなったと自ら述懐している<sup>7)</sup>。

##### b) 復興都市計画の全体像

『新修福井市史Ⅰ』によれば、福井市の復興計画は昭和20年10月20日に発足した復興本部内に設けられた土木、教育、商工、文化、社会、財務、ガス水道、総合計画の八委員会が研究を行い、市長の諮問に応じることとなった<sup>1)</sup>。また、各委員会には市会議員や学識経験者から委嘱し、各委員会には主査一人を置き、その主査が総合計画委員を兼ねることとなり、同年11月25日付で委嘱された。当時の福井新聞には復興計画の総合的な成案を得るため昭和21年1月15日頃に総合計画委員会を開いて決定したとある<sup>8)</sup>（**表1**<sup>9)</sup>）。

また、『戦災復興誌第7巻都市編Ⅳ』によれば、都市計画の街路計画及び土地区画整理計画は昭和21年5月3日に認可され、同年8月24日に内閣総理大臣から施工命令を受けた<sup>2)</sup>。都市計画の実施区域は検討を加えた結果、罹災地域面積約180万坪に対し、166万8千坪をその対象とした<sup>1)</sup>。

都市計画の起工式は新たに造られる44mの駅前通り敷地の中心点で昭和21年4月24日に県市共同主催のもとに

表-1 復興都市計画の根幹

復興都市計画の根幹
一、繊維産業を中心とする各種産業の発展と防火を重点に、街路の幅員を画期的に拡大し、交通のスピード化を計るとともに、工場敷地の留保と工業のための条件を強化する。
二、商業消費活動を活発にするため、商店街や繊維問屋街の配置については、街区構成上特別の注意を払う。
三、都市美の構成については、充分の配慮を加え、県庁、市役所付近を政治、経済の中心として造形に役立たせる。
四、適正規模の公園、緑地を、市街地全域にわたって調和的に配置し、また足羽川の河岸に緑地を造成し、足羽山自然公園の整備に努力する。
五、福井市のかねての計画にもとづき、市街地の全域にわたって改良下水道を建設し、抜本的な環境衛生の改善をはかり、近代的都市としての基盤をつくる。
六、北陸本線のカーブを直線化し、これに附随する福井駅を現位置よりやや東方に移転して駅前広場を設け、一等地の効率的利用に資する。
七、市街地各寺院の境内に点在する墓碑を一定地に集め、近代的墓園を造成するとともに、その跡の土地の有効的利用をはかる。
八、市北部の県営総合運動場を整備拡張するほか、野球場、庭球場、グラウンド、水泳プールその他の施設を充実し、市民の体育の向上とスポーツ精神の振興に資する。

行われた<sup>5)</sup>。つまり、街路計画及び土地区画整理計画が決定する10日前に工事に着手したことになり、このことから熊谷は道路の整備を急いでいたことが伺える。

昭和21年1月に斎藤新知事が赴任して来たことをきっかけに県と市は共同で事業を推進することとなった<sup>5)</sup>。斎藤知事が赴任する以前は宮田笑内が県知事を務めていた。福井新聞が報じるところによると宮田前知事は「復興は急を要するため細部にわたる都市計画をたててから建築に着手するのでは能率が上がらぬところから取敢えず都計道路と空地を内務省と打合せのうえで指定しこの地区を除くところへほとんど建築させる方針を取り<sup>10)</sup>」、また「復興の根本はまず住宅であり、これが促進されてこそ戦後建設の基礎も固まるのである、都市計画路線や区画整理がきまるのを待ってやるのはきわめて策だがこれでは復興は遅々として進みはせぬ<sup>11)</sup>」と、迅速な住宅建設を重視した。これに対し、熊谷は、「特に私の遺憾に堪えなかったことは、各戸の建築に少しも制限を加えなかった点で、同年十月六日の私記には「建築許可に区画整理の条件を付せざる当局の取扱い是不信也、早速照会の上対策を講ずることになす」と、計画の遂行に無関心な県に対する不満と自己焦慮の情を表している<sup>5)</sup>」と記しており、県の考え方と市の考え方に相違が生じていたことが伺える。

斎藤新知事就任後は市と県が共同で事業を推進することとなり、実態は不明だが、毎週定例の県市の会合を開き、事業の基本方針等を打合せ、必要経費は県市折半にすることや事業の執行は県が主体となること等が決定された。県を主体とした理由としては困難な事業に県を引

き入れることで有力な援助を期待するためであると熊谷は著書の中に記している<sup>5)</sup>。さらに、この都市計画に関する県と市の公式非公式を問わない頻繁な懇談によって相互の連絡の緊密さが増し、従来反目しがちであった県と市の間が親密となっていった。

また、県は復興を本格的に促進すべく計画遂行の根本方針を、①戦災前における地方都市としての機能回復、②地方産業文化の中心としての機能を発揮、③関係地方民力培養への寄与という3つの目標に重点を定めた。これらは市関係者の自主的計画を基調としつつ、戦災前における地方都市としての機能を復興することを基本とし、戦後における地方事情の変化推移を勘案して都市を中心とする関係地方の将来の繁栄を達成することを目標としている<sup>12)</sup>。

このような県と市の協調のもと、昭和21年9月4日には昭和21年度から24年度までの事業決定がなされ、同年10月9日には特別都市計画法適用都市の指定を受け、昭和22年4月7日には土地区画整理設計の認可がなされることとなった<sup>2)</sup>。

福井地震直前の昭和23年5月には特別都市計画事業費の割当増額陳情のため上京していた熊谷市長が帰庁し、福井市の都市計画は全国戦災都市に先駆け大体3年後には完了する見通しがついたと語っている<sup>13)</sup>。

しかし、『戦災復興誌第7巻都市編IV』によると昭和23年6月28日の福井地震によって3年間続けて来た約1,500万円の戦災復興事業の大半が水泡へと帰することとなったことが明らかにされている<sup>2)</sup>。福井市は昭和23年2月の時点で換地指定が終了しており<sup>14)</sup>、全国でも2番目の復興の速さであった<sup>15)</sup>。だが実際の移転は50戸程度しか行われていなかった<sup>5)</sup>。これには、熊谷市長の考えが大きく影響していると思われる。昭和22年3月頃換地指定が開始されることに対して都市計画反対運動が活発となるが<sup>16)</sup>、これに対して市は下記の声明を発表した。

「換地は現在復興している家屋には大体影響せぬように行ふ心積もりだ、また幹線道路などで止む無く換地しなければならぬものに対しても換地決定と同時に移転しろといわぬ、市としては市民のそれぞれの事情と時勢をよく見て都合のよい時期に、それも相談づくで実施してもらいたいと思う、その結果、三年、五年場合によってはそれ以上の年月を要しても一向差支えない、市として急いでいるのは道路、公園、学校などの計画完成とこれにもとづく換地の決定でこのうち計画は大体出来上り換地は近日中開始、数か月後には一応全部完了することになっている、もちろん今後建築される家屋は換地の上に建ててもらわねばならぬが従来の家屋は都合がつくまで移転しなくてもよいため、決定された換地が空かない間は市有地その他を提供して便宜をはかる、とにかく市民に

苦痛なく知らず知らずのうちに街が生れかわり住みよい街になるというのが市の考えである<sup>16)</sup> (下線筆者) 」

つまり、都市計画反対の機運が高まる中で、市は住宅の移転をすぐに行わなくてもよいという考えを示しており、移転までに3、5年、場合によってはそれ以上の年月がかかってもよいという姿勢であったため震災前は50戸程しか移転が進まなかったと考えられる。結果的に震災が発生した当時、復興家屋が約14,000戸あり、その内要移転家屋が推定約4,500戸も存在しており、事業が進まないことに苦悩した市は震災発生の日前に約200戸に対してとうとう初の移転命令を発している<sup>5)</sup>。

しかし、この要移転家屋も震災によってほとんどが倒壊することとなるため、家屋の移転が容易となると共に、この機会を逃すまいと市は家屋の移転を促進することになり、震災後も戦災復興都市計画を震災復興都市計画として継続遂行することとなる。

この後、昭和24年には経済九原則の影響を受け、「戦災復興都市計画の再検討に関する基本方針」が閣議決定され、全国的に戦災復興都市計画は縮小されることとなるが<sup>17)</sup>、福井市の復興都市計画は昭和25年度から五カ年計画で完成することに決定した<sup>18)</sup>。昭和26年6月には都市計画は全体の53%を終了し<sup>19)</sup>、昭和27年5月には62.9%を終了した<sup>20)</sup>。また、同年11月には県が昭和30年から五カ年計画として進める第二次戦災復興都市計画を立案し建設省と折衝の末承認された<sup>21)</sup>。『戦災復興誌第7巻都市編IV』によるとその後事業執行年度割は昭和32年まで短縮されたことが記されており<sup>2)</sup>、『新修福井市史II』に昭和32年に予算の裏付けが思うように得られず進捗率は88%にとどまったため、さらに、事業執行年度は37年まで延長され、最終的に昭和44年に戦災復興土地区画整理事業の完成式が行われるが、清算事務は残されたため事業完了年度は昭和46年であるとある<sup>3)</sup>。戦災復興都市計画図を図2に示す。

#### c) 事業実施機構

『新修福井市史I』によると戦災当初は熊谷市長を中心とする道路委員会がつくられるが、福井市復興本部が昭和20年10月20日に設立されることによって解散し、県ではそれよりも一ヶ月早い同年9月に知事を会長とする福井市及び敦賀市の復興委員会が設けられ、また市内に知事を本部長とする復興本部が開設された<sup>1)</sup>。この当時は県にはまだ計画課が存在せず、前川正が土木河川担当の一技師としてのかたわらで都市計画の事務を行っており、全体として熱も薄く、力が入っていなかったという。昭和21年3月小林庄平が土木課長として就任し、その下で前川技師が都市計画係長として都市計画に専念することとなる<sup>5)</sup>。

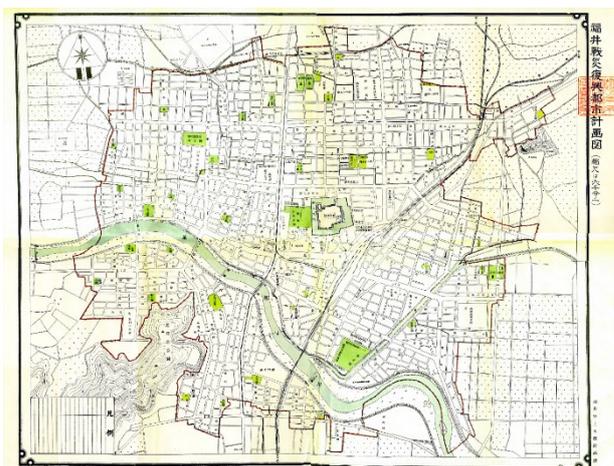


図-2 福井戦災復興都市計画図 (市政専門図書館所蔵)

## 4. 熊谷太三郎の思想

### (1) 文化都市の建設

福井市の復興に大きく寄与する熊谷太三郎の経歴は京都帝国大学経済学部を昭和5年に卒業し卒業後は家業を継ぎ、昭和15年父三太郎の後継者として株式会社熊谷組の二代目社長となる。さらに市議会議長を経たのち昭和20年10月2日福井市長に就任する<sup>1)</sup>。熊谷は市長就任直後の同年10月7日に福井新聞内で復興に対する思いを下記のように述べている。

「福井市将来の大計を具体化するいはゆる復興の構想を樹立したいと思ふ、例えば道路網の確立のごとき将来の計画に属することでも復旧と同時に、むしろこれに先んじて決定を要するものは、躊躇なく実行するつもりである、(中略) 復興福井の理想的形態を端的に実現するならば、それは外面的にも内面的にも、物質的にも精神的にも模範的な文化都市の建設にありといふことが出来る、しからば文化都市とは何ぞやといふに、それこそ真実をもとめ、真実を愛する熟度の高い都市である、いままでの本市のかへりみるにその都市的外観においても、内面的に、思想的においても、その熟度はあまりにも低調であった、(中略) 同時に私は郷土福井をして、かかる更生日本の先駆都市たらしめたいと念願するのである、かかる念願を實際上各方面にどの程度まで具体化し得るかは、素より確たる自身を有しないが、福井市を愛するすべての方々が、真実愛好の精神こそ、郷土再建の唯一の力であり、鍵であることを一層深く認識せられ、微力な私に力を添へていただいて、わずかなりともその実現を期し得られるやう補助の程を衷心切望する次第である<sup>2)</sup> (下線筆者) 」

熊谷は日本が敗戦という宿命を辿ることになった根本

的な原因は虚偽や因襲に捉われ、真実が忘れさられ勝ちであったことにあったと考えた。そのため福井市の復興の理想像として真実を求め、真実を愛する熱度の高い文化都市を掲げた。さらに外面的にも内面的にも、物質的にも精神的にも模範的な文化都市としての復興を目指し、福井の復興を更生日本の先駆都市としたいと考えており、それを実現するために真実愛好の精神が復興の唯一の力であり、鍵であることを市民に認識するよう求めている。

また、昭和21年元日の福井新聞でも「屈辱と貧窮のどん底に在るのだけれどもたった一つ得たものがある。それこそ真実への自覚、真実への慕情ではなからうか。

11) 」と語り、「国家の進む真実の道、民俗の生きる真実の道を歩んで行くならば前途には明るい光明がある、さうだ、我々はすべてに涉って、もっともっと真実を尊重しよう<sup>22)</sup>」と述べ、真実を求めることが今後の福井市の復興には必要不可欠であることを認識している。

さらに、この新聞記事の中で熊谷は市長を引き受けた理由についても下記のように言及している。

「それは市会議長として、後任市長の人選に関する最後の責任を負わされたことにもよるが、もっと深く内面的な動機は、この美しく豊かな郷土に対して、忽然として蘇えった愛惜の感情に他ならない。郷土愛は祖国愛につづく。自分の生まれた土地、自分の住む土地を愛し得ずして、どうして祖国を愛し得よう。郷土愛に発した動機は同時に祖国愛に発した動機でもあったのだ。（中略）ただ僕は郷土の人に、少しでも深く郷土に対する愛情を自覚して貰うように努めたいと思ふ。各人の間に郷土愛が広まり、各人の胸に郷土愛が深まって行けば、其愛情の発露のままに自らにして郷土は立ち直って行く。同じ精神と行動がひとりでに祖国を再建して行く<sup>22)</sup>（下線筆者）」

ここでは郷土愛が自らに市長という大役を引き受けさせたこと、郷土愛が復興の鍵となること、さらには郷土愛が日本の復興に繋がって行く事を示唆しており、真実愛好の精神と共に郷土愛が復興の基盤となることを熊谷は認識していたと考えられる。

熊谷はこれらの考えのもと福井市の復興を行ったのであるが、この思想が現れている事業として下水道計画、史跡の顕彰、公園・緑地計画が挙げられるため、次節からこれらの事業について詳しく見て行くこととする。

## (2) 下水道計画

当時下水道計画は政府の都市計画に関する一般方針の中には含まれていなかったが、熊谷は都市計画に併行して改良下水道計画を実施する。この下水道計画は昭和11年に当時市議会議長を務めていた熊谷が提唱し、3ヶ年にわ

たり京都帝国大学の大藤工学博士を顧問に委嘱し、改良下水道に関する調査、設計を進め、昭和15年には予算化するに至っていた。しかし、時局の悪化に伴い下水道計画は中止となったため、熊谷の中で復興都市計画において下水を布設することは念願となっていた<sup>5)</sup>。昭和22年4月に調査が開始され<sup>16)</sup>、同年7月19日に水道常任委員会を開き、実施計画について協議した結果、十ヶ年計画で総予算額1億8千6百万円を投じて同年度から工事に着手することに決定した<sup>23)</sup>。昭和23年4月24日に起工式を挙行したが<sup>24)</sup>。設計指導及び建設工事顧問は元東大工学部長工博の草間偉が担当した<sup>25)</sup>。

下水道計画は福井地震や昭和24年度に国庫補助対象であった宅地予定地の廃水路の埋立費の打ち切り<sup>26)</sup>、資材の値上がり、起債の制限などで、昭和25年度で22%の完成を見込んでいたものの、12.2%しか進捗しない結果となった<sup>27)</sup>。事業遂行は困難を極めたが、大動脈の最大幹線は昭和27年8月に殆んど完成し<sup>28)</sup>、昭和32年には完全に排水機能を果たせるようになった<sup>9)</sup>。

「あらゆるもんが駄目になっても下水だけはやり通したい<sup>29)</sup>」と語るほど熊谷が下水道計画に力を入れることになる根本的な思想とは一体どのようなものであろうか。

下水道計画を復興都市計画で推進する理由として熊谷は「本市の特殊な地勢上、之を実施しなければ折角の都市計画も十分な効果を発揮することが出来ない<sup>5)</sup>」と著書の中で記している。『新修福井市II』によると福井市の市街地の標高は6.3mから9.5m、平均8.0mであるのに対し、足羽川の洪水水位は10.4mであり排水不良面積は約70haに及んでおり、降雨時はもちろん晴天時でも水たまり箇所が生じるなど不衛生極まるものであった<sup>9)</sup>。

熊谷は、下水道計画を推進するにあたって「文化都市」の構想を念頭に置いていた。人々の生活を支える社会基盤が満たされて、初めてその文化の基礎が築かれて行くという思想を持っていた。すなわち「文化と言うソフトなイメージとはほど遠い治水ではあるが、生活の基盤であるかぎり、それが先行してこそ、はじめて「文化のふるさとづくり」すなわち生活文化の基礎がきずかれていくのではないだろうか<sup>30)</sup>」と語っている。

## (3) 史蹟の顕彰

熊谷は市内の復興が次第に緒につきはじめると、史蹟の顕彰を思い立った<sup>5)</sup>。これは戦時中から荒れるがままに放置され、忘れられていた史蹟を保護することにより、市民に郷土の誇りを再認識させるとともに観光文化都市建設への基礎とすることが目的とされ、熊谷市長の案に基き市民館が主体となって調査が進められ<sup>31)</sup>、昭和23年1月に20ヶ所を史蹟に内定した<sup>32)</sup>（表2<sup>1)</sup>）。

表-2 初期の史蹟顕彰一覧

天守閣と福井、北ノ庄城跡、異人館跡、橘曙覧誕生地、橘曙覧宅跡、橋本左内宅跡、橋本左内墓所、養浩館跡、由利公正宅跡、明新館跡、岡田啓介誕生地、加藤寛治誕生地、丹羽長秀墓所、吉田東篁墓所、岩佐又兵衛墓所、堀秀政墓所、柴田勝家墓所、三秀園跡、丹巖洞、新田塚

事業の内容としては、基本的に福井工専の坂部教授設計による花崗岩又は福井市の特産である笏谷石の標碑を建立し、それぞれの碑面に簡単な由緒を記すものであったが、福井市が生んだ近世歌人の橘曙覧の宅跡は当時の井戸側を残し、往時を偲ぶにふさわしいものがあることから、都市計画によってその一部を未指定の公有地とし、百坪の小庭園を設けた<sup>5)</sup>。また『新修福井市史 I』によると第7代福井藩主松平吉品が茶師山田宗偏に命じて造らせた別邸である養浩館を、昭和28年に当時の所有者であった旧制福井中学校同窓会の明新会から福井市に寄付するという申し入れがあったため、これを機に戦災や震災で焼失していた建物の復元計画を立て、翌年に再建したとある<sup>1)</sup>。熊谷は昭和23年2月28日に開かれた福井市議会では史蹟保存費として20万円を計上した際、下記のことを述べている。

「特に史蹟保存費として二〇万円を計上したのでありますが、これは都市計画の進行と同時に郷土に遺された由緒古い二〇数カ所の史蹟を保存顕彰せんとするものでありまして、焦土の各所に往昔を偲ぶゆかしい情緒を呼び起こすよすがの場所を設けると共に、これによって郷土人として後世の孫に対する一つの史的責務を果たしたいと考えるのであります<sup>33)</sup> (下線筆者)」

さらに、建設省区画整理課技官の五十嵐醇三は昭和24年に視察のため初めて福井を訪れた時の様子を雑誌「新都市」の中で下記のように記している。

「青年市長が懐いている郷土に対する文化的都市計画は、震災復興の進捗と共に着々と実現を見ている、その一つは福井市の史蹟を記念して新しく建設せられつつある記念碑である。従来記念碑と云えば、往時の戦史、軍人等のものが多いのであるが、ここのゆかしい文化の跡を記念しているものが多い。(中略) これらの事は何でもないことであるが自分達の郷土がどんな風にして生い立って来、どんな先人が住み、何を残していつてくれたかを知るよすがとして、小公園の中に又通りがかりの道端に之を記念した碑の立てられてあることは、知らず知らずのうちに郷土に對する懐かしい愛情を市民の心に植えつけて行ってくれることであろう。又旅人の心にもこの都市のゆかしさが忘れられない印象となつて残ることであらう。<sup>34)</sup> (下線筆者)」

熊谷は復興には不可欠だと考えていた「郷土愛を育む」という思想を史蹟顕彰を通じて具現化していることが読み取れる。

(4)公園・緑地計画

a) 初期の構想

福井市復興本部に設けられた文化委員会は昭和21年1月に時代性に基づく体育文化の建設について協議し、幼児や少年の遊技場としての小公園の敷地予定地を決め、市内4箇所に市営プール、体育館、市立商業学校を利用した市民総合運動場の建設などを計画した<sup>35)</sup>。さらに、同月23日付の福井新聞では再建福井市の文化建設は高度且つ恒久的なものにしようと計画された主な構想を掲載している(表3)。特に市民の民主的精神とスポーツ精神の向上を期するため市体育館の建設、市営総合運動場、水泳プールの建設は緊要としていた<sup>36)</sup>。

b) 公園・緑地の配置

戦後復興における福井市の公園計画を既往文献をもとに概観すると、『新修福井市史 II』では戦前の福井市には自然公園の足羽山と葵公園以外には公園らしい公園はなかったが、市民は二度の災害の経験を通じて公園・緑地の必要性を痛感したとある<sup>9)</sup>。そのため都市計画のもとで公園・緑地帯を設け、都市の緑化を図ることとした。『戦災復興誌7巻都市編IV』によると基本的には市街地の中心地でシビックセンターに近い場所に中央公園を配し、その東西南北に大きな近隣公園をおき、その間に児童公園を普遍的に配置するものとし、市街地内の公園面積の割合を10%とすることを目標としたとされる。公園

表-3 初期の公園・緑地構想

初期の公園・緑地構想
一、福井城址の風致を利用して福井神社、佐佳枝神社境内を背景に官公街を含めて市内中央公園地帯を形成、これに附随して図書館、科学館、体育館、市民プール等の施設を設置、市営総合体育場の建設をも考慮に入れて一大近代文化中心街を形成する
一、公園は自然の風致を背景とした足羽山公園を拡充するが小公園は駅前広場、東西両別院、城東橋西側一帯、平岡山、三秀園跡を計画、その他適当な地域を選定する
一、市内神社仏閣等の境内を利用して小公園化し児童小運動場に解放せしめるよう勧奨する
一、観光客及び市民の特別享楽地帯(料理屋、待合、貸席、カフェー等)は郵便局以西(元公園地中心)に置き貸座敷業は現在の榮遊廓附近におき成るべく足羽川を挟んで兩岸相對しての不夜城街を建設する
一、緑地帯は豊橋省線鉄橋以西の兩岸を計画、市民の散歩に適せしめる、其他は更に研究を行ふ
一、街路の緑地帯は幹線道路を中心に適当な植樹を行ふ
一、各学校下毎に市民館を設置、町内会事務所の事務及託児所、健全娯楽、集会所に充てしめる
一、図書館は県立に移管して内容を充実せしめると共に科学館を併置、越前文化の發揚源泉機関に充てしめる

・緑地計画は昭和22年7月2日に開催された第16回都市計画福井地方委員会で市内25公園，1緑地，面積16.7haを決定し，同年7月17日に正式に都市計画決定をみた。しかし，諸種の事情で困難を極めたこと，配置についての普遍性をより強化するため，昭和29年12月13日に39公園，4緑地，面積13.53haに変更されたという<sup>2)</sup>。

新聞の報じるところによると，昭和22年には国民体育大会における福井県の敗退をはじめとした県内の不振な運動界の原因として適当な施設がないことが挙げられ，公園内に建設する予定であった各種競技場を早急に具体化することとなり<sup>3)</sup>，昭和23年5月に福井球場の建設が始まった<sup>3)</sup>。同年10月に野球場を完成させた福井市は，同年11月児童公園の建設に乗り出すことになったが<sup>3)</sup>，予算の関係で思うように進まず，昭和24年11月の時点で10ヶ所の整地を完了したのみという状況であったため，昭和25年度から一気に公園を完成させる計画を立てた<sup>3)</sup>。その後，昭和25年度には文化の日に合わせて18カ所の公園開きを行ったものの<sup>4)</sup>，昭和28年7月時点で都市計画の公園設置予定数は足羽山公園を除いて37とされており，すでに予定地の95%の確保と地ならしが進んでいるが，全体の3分の1しか事業は進捗していなかった。翌年に公園の数が39と変更になるが，その公園の敷地の確保と整地は変更決定以前に行われていたことが分かる。

このように公園・緑地は多くの時間や苦勞をかけて建設されたわけであるが，その配置においては①何処の地区の子供達からもほどほどの場所にあること，②子供たちが最寄りの公園へ行く道に交通量の激しい道がないことに配慮して配置された。また，運動場が併設された近隣公園は利用者の便を考慮して市の中心から適当な位置に配置されている<sup>4)</sup>。(図3<sup>4)</sup>)このような配置計画の裏には熊谷市長の「都市にだって座敷や庭園がなくちゃ息も抜けないではないか」という考えや，「この美しい郷土からこそ限りない郷土愛が沸き起こってくるのだ<sup>4)</sup>」という理念が存在した



図-3 公園配置計画図

### C) 足羽山の植物園化

熊谷は戦後焼けた市街地に立ち，一面廃墟と化した中で健やかに佇む美しい足羽山と出会う。普段は市街地の壁に遮られているため山の一部しか見えず，山裾まで見る事はできなかったものが，戦災により市街地からはどこからでも足羽山の姿が望まれたのである。この足羽山との出会いについて熊谷は「生まれて四十年こんな足羽山の全き姿に接したことはかつて無い。(中略)はじめて望む足羽山の全き姿は此上なく美しい。八月から九月にかけて，山を覆う青い茂りははいよいよ奥深さを増し，心の憩いと豊かさを求めるすべての人々の目を惹付けずには置かない。(中略)郷土福井の持つ自然の美しさと豊かさに，僕は強い感動を覚えたのである。<sup>1)</sup>」と述べ，続けて郷土愛について語っている。このことから，熊谷は郷土愛を育むためには自然の美しさに目を向けることが必要であることを自覚していたことが伺える。さらに，熊谷は著書の中で，「身近な自然に関心を」と題して下記の提案を行っていることから，自然に目を向けることが真実を愛する文化都市にとっては不可欠であることが読み取れる。

「われわれは身近な自然を知らなさ過ぎる。道への草木を見ても，山野をめぐって季節の花に出あっても，頭上を過ぎる鳥の姿や鳴声に接しても，夜空に光を放つ星を仰いでも，遠近の山々を見渡しても，殆んど知らないものが多い。できるだけそれらの名前を覚えよう。そして身近の自然に親しむ習慣を身に付けよう。それによってわれわれの精神生活はどれだけ豊かになるか分からない。世の中のことを素直に地道に考える習癖を養う上にも大きな効果がある。別に大した金がかかるわけでもなく，心がけひとつで容易にできることではないか。「ふるさとづくり」の柱の一つ「うるおいのある人間性への出発」にはどんな構想が盛られているのか知らないが，この「身近な自然に親しむ」ことこそ，そのために大きな役目を果たす一つにならないだろうか<sup>3)</sup>。 (下線筆者) 」

このような足羽山との出会いを経験した熊谷は，昭和20年から食糧増産のため付近の町内会に蔬菜園として貸与していた足羽山の耕作を昭和21年11月には禁止し，庭師2名を入れて清掃美化に努め，昭和22年度から美しい公園に再生させ施設を充実するように考えた<sup>4)</sup>。さらに，昭和23年4月に敦賀で行われた北信越市長会の会議中にふと足羽山を思い出し，これを植物園化する計画を思いつく<sup>4)</sup>。初期の構想としては，季節の花樹を一团ずつ計画的に配置し，三月の開花期から十月の紅葉期までの間全山の肌に花の絶えない様にし，市街から眺めて足羽山にあたかも花のネオンサインがつつぎつつぎに出現する様にするというものであった<sup>5)</sup>。さらに，足羽山は標

高90mという高さが障害となり、普段市民の利用する度合いが少ないため設備が十分促進されず、結果的に市民の利用も促進されないという悪循環に陥っていたため、熊谷は足羽山の既存の循環道路を更に尾根沿いに延長して自動車の走る幹線道路とし、この幹線道路を中心として左右の樹間に適当に小径を配置するという構想を思い付く<sup>5)</sup>。昭和23年末から調査、研究を行い、昭和24年春から三ヵ年計画で全山の植物園化を目指すべく堀芳孝光陽中学校長に計画を依頼した<sup>45)</sup>。その後植物園化の話が京都大学の関口鉄太郎の耳に入り、協力する旨の申入れが届いたため昭和24年秋に関口を迎え現地調査をし、既に計画立案中の堀芳孝光陽中学校長と打合せを行い、関口の下で具体案が作成されることとなった<sup>46)</sup> (表4)。昭和26年に出来上がった最終案では足羽山を①鑑賞地区②郷土地区③見本地区の3つの区域に分けるというものであり (表5) (図4)、十ヶ年計画で着手された<sup>47)</sup>。

この図からも分かるように、当初の足羽山植物園化構想は足羽山の大部分に植樹をして、文字通り足羽山全体を植物園にしようとしていたことが読み取れる。

昭和27年に開かれた福井復興博覧会では足羽山が第二会場となったため、これに備えて先ず鑑賞植物園が整備されることとなり、昭和29年に後年度の補足拡充を期待して不十分ではあるもの一応完結させ、続いて郷土植物園の三ヵ年計画に着手した<sup>48)</sup>。昭和30年は財政上の都合もあり、事業を縮小して鑑賞植物園の補完、郷土植物園の一部植栽のみに止まった<sup>49)</sup>。昭和31年3月の市議会では熊谷が、「本年は郷土園敷地の区画整地を計画し漸次苗圃より移植して近い将来之が完成を図りたいと存するのであります<sup>50)</sup>」と述べている。その後昭和34年に郷土植物園も完成したが<sup>1)</sup>、見本地区は断念したことを熊谷は著書の中で記している<sup>44)</sup>。

表-4 足羽山植物園化構想の推移

□熊谷太郎, 昭和23年

- ・季節の花樹を一団ずつ計画的に配置し、三月の開花期から十月の紅葉期までの間全山の肌の花の絶えない様にし、市街から眺めて足羽山にあたかも花のネオンサインがつつぎに出現する様にするというもの
- ・循環道路を更に尾根沿いに延長して自動車の走る幹線道路とし、この幹線道路を中心として左右の樹間に適当に小径を配置するという構想

□堀芳孝, 昭和24年

- ・藤島神社中心には桃、梅、桜、ツツジ、モミジ、車道登り口周辺にはサルズベリ、キョウチクトウ、ハギ、タニウツギ、一般登り口から水道貯水池付近にかけてはコデマリ、ムクゲ、ハギ、コブシ、ハナズオウ、三段広場を中心としてはツバキ、アベマキ、フチ、ツツジ、キンモクセイ、桜、御手植松広場中心にはアジサイ、レンギョウ、リョウブ、フラウツギ、アシビ、ヒメハギ、タニウツギなどどこでも四季とりどり何かの花は咲いているという配置

□関口英太郎, 昭和26年

- ・植物配置は広場を中心に風致植物園区をつくり、道路を中心にしてはハイキングを行いつつ知識を得られるように郷土植物園区をつくる、その他の土地には内外主要樹種を植栽して

- ・一般人に応用的知識を与える一方林学上の好参考資料にするため見本地区をつくる
- ・藤島神社境内は清浄にして静かな休養所とし全面にはサクラ、ウメ、モモ、ツツジ、ヤマブキ、ハギを植栽、清麗な季節的景観を現出、背後にはツガ、モミ、ナギ、カシなど濃緑の樹木を設け森羅な気分を漂わす、三段広場には児童遊技場と飼育の容易な動物をおき多少遊園地的気分を出すため樹性強健で緑陰を主にしたものをえらび、スズカケノキ、ニセアカシヤ、トウカエデ、イチョウ、ソメイヨシノザクラなど、建築物としては四阿藤棚など設ける、招魂社境内 (お手植松広場) は三つの広場のうち最も高所であるから眺望を主とした清楚な休憩所にするため展望台を設ける、植物としてはナナカマド、ナンキンハゼ、アラマツ、ブナ、ニレ、トチ、シラカバ、トウヒ、コウヤマキなど平常一般人の眼にしないしかも新緑、紅葉、樹蔭の美しいものやヤマザクラ、シグレザクラ、タイザンボク、ネム、シャクナゲ、ドウダンのごとき優雅な花木を植栽する
- ・一方植物園であるとともに自然公園としての施設も加える必要があるため植物園会館をつくり学生などが常時利用できるようにする一方自然環境のなかで楽しむため傾斜面を切り開き野外劇場をつくるほか、小動物園、教材園も設ける
- ・さらに鳥類を園内に誘致するため鳥類の好む果実をつける樹木で保護林をつくり各所に巣箱を作る

表-5 足羽山植物園の3地区

地区	位置	内容
鑑賞	五岳楼と孝頭寺の二つの登り口から元招魂神社までの道路一帯	<ul style="list-style-type: none"> <li>・四季それぞれの花の咲く草木を集团的に植える多いものは一種類千五百本、少ないものでも百本ほど予定</li> <li>・主なものは櫻、梅、桃、ツツジ、谷ウツギ、萩、さるすべり、キョウチクトウ、山吹、ツバキ、山茶花、ムクゲ、花スノウ、コブシ、レンギョウ、アジサイ、クチナシなど</li> </ul>
郷土	頂上から尾根沿いに瑞源寺にいたる新設車道の両側一帯	<ul style="list-style-type: none"> <li>・約八百種類に上る県内産のあらゆる草木を植える予定</li> <li>・県内三ヵ所 (福井市、大野、若狭) に苗圃を設けて移植</li> </ul>
見本	頂上から足羽山の南北両山腹に新設中の二本の歩道の両側一帯	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な植物をその用途別に区分して植える予定</li> <li>(例) △家具工芸用 (アベマキ、ウルシなど) △薬用 (アカシヤ、あせび) △繊維用 (ポプラ、シュロ) △飼料用 (クワ、ニセアカシヤ) △燃料用 (クチナシ、タブの木) △油香、ろう用 (アブラギリ、ハゼ) △肥料用 (ハギ、ハンノ木) △食用 (クルミ、クリなど) このほかヒノキ、ヒバ、松など用材用植物も約百種植える</li> <li>・植物にはすべて立札を立て来にもよくわかるように計画</li> </ul>

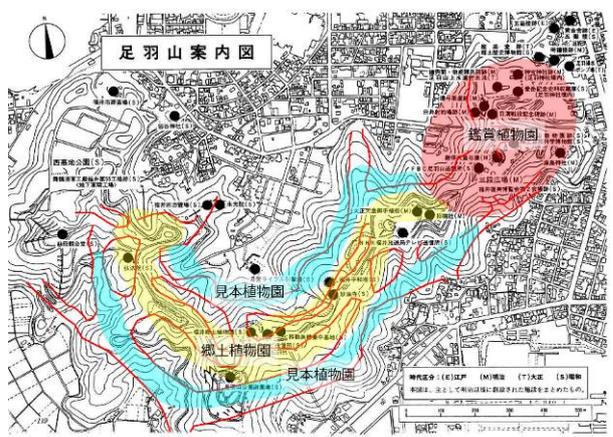


図-4 植物園化構想の概念図

#### d) 河岸緑地の設定

福井市は昭和25年10月から翌年の8月完成を目指して足羽川の右岸約1kmに河岸緑地の建設に着手した。これは震災で壊れた足羽川の堤防の復旧のため北陸線鉄橋から九十九橋までの右岸がコンクリートで固められたため、道路を歩く人が河原や対岸の景色を見る事が出来なくなったことに配慮して、予算約200万円で遊歩道を作ろうというものであった。緑地の幅は最大8mから最少2mまでであり、堤防の頂点からは約60cmから90cmに設計されており、子供でも歩きながら対岸を眺められるようになっている(図5)。河岸緑地には松、柳、桜を植え所々にベンチを設置し、電燈も設置され、当時の市土木課職員は「完成すれば市民の楽しい散歩道になるでしょう<sup>51)</sup>」と語っていた。

震災後建設された河岸緑地であるが、昭和22年7月17日の公園緑地計画決定の際に決定された緑地の位置は

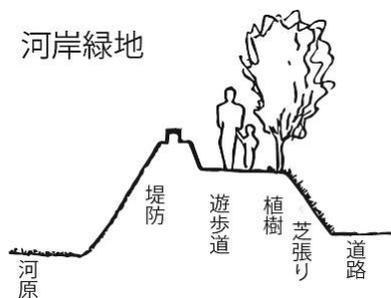


図-5 河岸緑地の断面図

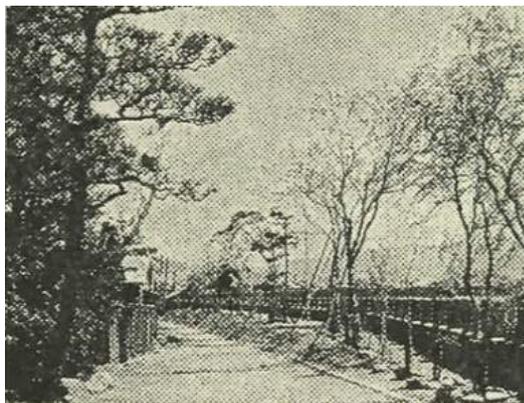


図-6 河岸緑地



図-7 緑地と河岸緑地の位置関係

「福井市湊上町より豊島中町に至る足羽川右岸堤、地積約1.04ha<sup>52)</sup>」となっているのに対し、『新修福井市史I』には河岸緑地は北陸線鉄橋から九十九橋までであり、地積も0.42haとあり<sup>1)</sup>、決定されていた緑地すべてが河岸緑地として整備されたわけではなかった(図7)。この地域に緑地を設定した理由としては上記に加え、ここが足羽山を望むことができる景勝の地域であり市内の風光を代表する唯一の場所とされており、ここに緑地を設定して市民の利用を促す為であった。この案は都市計画の立案時から議題に上がっていたが、その実現は建設省の高谷技官の勧告に基いている。もともとこの地域は料亭、旅館、別荘、その他数個人が占領していたのであるが、熊谷は河岸緑地の建設に賛成しつつも、この人々からこの土地を取り上げることを容易に決断することが出来ずにいた<sup>5)</sup>。そんな熊谷の背中を押したのが高谷技官であった。高谷技官は福井市近郊の産れであり、熊谷とは福井中学の同窓同級の友人関係にあった。さらに長年都市計画の技術面に携わり広い智識を持っていた。熊谷はそんな彼の勧告について著書の中で、「彼の勧告は郷土に対する深い愛情と都市計画に対する豊かな造詣に基いているのである。」と記しており、ここでも熊谷が郷土愛を重要視していたことが読み取れる。

#### 5. まとめ

本研究では、福井市の復興の全体像を整理し、復興に大きな影響を与えた熊谷の構想を明らかにした。前半では主に戦災復興を震災復興として推進した福井市の復興計画が策定される時期に着目し、熊谷の考えや市と県の考えの相違を明らかにし、後半では復興における熊谷の思想を明らかにした。以下、要点をまとめて示す。

①戦後の復興においては熊谷が逸早く道路委員会を組織し、都市計画の骨組みとなる道路網の整備に力を入れたが、その背景には道路網の決定を急ぐことで家屋復旧を急ぐ市民に都市計画の存在を認識させ、その後の都市計画を円滑に進めるための思惑が存在していた。

②震災前は家屋の移転は強制していなかったが、そのために要移転家屋が増え都市計画の推進に支障をきたすこととなっていた。

③熊谷の復興における思想には「真実愛好の精神」、「郷土愛」という2つの柱が存在していた。

④さらに「真実愛好の精神」、「郷土愛」を育むためには自然に目を向けることが重要だと認識しており、この思想のもと下水道計画、史蹟の顕彰、計画的な公園・緑地の配置、足羽山の博物園化、河岸緑地の設定を実現化していった。

戦災、震災という度重なる災害に直面し、市民の生活を支える社会基盤の復興を目指すことは急務であったが、その中で実際に社会基盤を利用し、都市で生活する市民の「精神の復興」や「熟度の高い人間性の形成」に重点を置いて、社会基盤や都市の復興を目指したところに熊谷の特徴があるといえる。

**謝辞：**本研究を進めるにあたり資料を提供して下さった福井市役所、福井市議会、福井歴史郷土博物館の方々に厚く謝意を表す。

#### 参考文献

- 1) 福井市：『新修 福井市史Ⅰ』 pp.510-514, p709, p974, p984, p989, pp.1011-1012, pp.1047-p1048, 1970
- 2) 建設省：『戦災復興誌 第7巻 都市編Ⅳ』 p.353, p360, p399, pp.403-404
- 3) 福井県：『福井震災誌』 p.37, 1949
- 4) 高柳則夫：福井震災と復興及び福井震災 50 周年記念事業を終えて、『建築防災』, 250, p8, 1998
- 5) 熊谷太三郎：『たちあがる街から』 pp.19-24, pp.27-28, pp.31-32, pp.35-36, pp.40-41, pp.136-137, 1955
- 6) 1945.9.11 福井新聞
- 7) 1945.9.13 福井新聞
- 8) 1946.1.28 福井新聞
- 9) 福井市：『新修 福井市史Ⅱ』 p.1134, 1137, pp.1311-1312, pp.1153-1154,
- 10) 1945.8.27 福井新聞
- 11) 1946.1.1 福井新聞
- 12) 1946.1.28 福井新聞
- 13) 1948.5.21 福井新聞
- 14) 1948.2.19 福井新聞
- 15) 1948.1.21 福井新聞
- 16) 1947.3.8 福井新聞
- 17) 1949.6.24 福井新聞
- 18) 1949.8.28 福井新聞
- 19) 1951.6.16 福井新聞
- 20) 1952.5.3 福井新聞
- 21) 1952.11.2 福井新聞
- 22) 1945.10.7 福井新聞
- 23) 1947.7.21 福井新聞
- 24) 1948.4.11 福井新聞
- 25) 1948.4.24 福井新聞
- 26) 1950.5.25 福井新聞
- 27) 1951.2.17 福井新聞
- 28) 1952.8.17 福井新聞
- 29) 1952.1.1 福井新聞
- 30) 熊谷太三郎：『日刊随筆』 pp.45-48, 1987
- 31) 1947.11.19 福井新聞
- 32) 1948.1.23 福井新聞
- 33) 福井市議会：『福井市議会会議録』, 1948.2.28
- 34) 五十嵐順三：新生の福井市を見る、『新都市』, 2, p.45, 1950
- 35) 1946.1.10 福井新聞
- 36) 1946.1.23 福井新聞
- 37) 1948.5.13 福井新聞
- 38) 1948.11.6 福井新聞
- 39) 1949.11.10 福井新聞
- 40) 1950.10.27 福井新聞
- 41) 1953.7.27 福井新聞
- 42) 建設省：『戦災復興誌 第1巻 計画事業編』 附録 p.47 を基に筆者作成
- 43) 1946.11.19 福井新聞
- 44) 熊谷太三郎：『私の春秋』 p.97, p.248, 1980
- 45) 1949.11.30 福井新聞
- 46) 福井市議会：『福井市議会会議録』, 1950.3.20
- 47) 1951.3.18 福井新聞
- 48) 福井市議会：『福井市議会会議録』, 1954.6.11
- 49) 福井市議会：『福井市議会会議録』, 1955.3.9
- 50) 福井市議会：『福井市議会会議録』, 1956.3.10
- 51) 1951.2.14 福井新聞
- 52) 都市計画福井地方委員会：『第十六回都市計画福井地方委員会議事録』, 1947.7.2